

第9号
2007年12月



◇新潟まち遺産の会会報 第9号
2007年12月18日発行
◇新潟まち遺産の会 (代表 大倉 宏)
〒951-8066
新潟市中央区東堀前通1番町353
E-mail: chanoma@machi-isan.sakura.ne.jp
TEL 025-228-2536 / FAX 025-228-2537
<http://machi-isan.sakura.ne.jp/>

◁▶▷二宮家の米蔵で踊る◁▶▷

10月21日(日)、堀川久子舞踏「二宮家の季節 米蔵が鳴る」が聖籠町の二宮家の米蔵で催されました。これは文化庁の歴史的建造物の活用のための委嘱事業で、当会としては大規模な予算を得ての公演でした。

雨模様のなか、2回の公演で300名を超える観客が集まり、米蔵はざわめきと熱気に包まれました。

米蔵は2棟。古い方の蔵には、高さ4メートルを超える梁から床まで届くダイナミックなアート作品と、部屋をほの暗い光で満たすビデオアートが展示されました。そのなかを、堀川さんは若手のダンサーや、土臭さや懐かしさやバタクささの入り交じった音楽を奏でる3人の音楽家とともに、踊りつつ巡りました。後半は、新しい方の蔵に設けたもみ殻を築山のように築いた舞台で踊り納めました。

当会がこの公演を企画したのは、地元蓮野地区の人々と協力しつつ二宮家の歴史的な建物を活用する土台を築くためです。教育委員会などからの協力は得られましたが、地元の方々との協力関係は一朝一夕に築けるものではないことも痛感しました。でも公演に来てくださった地元の方々、米蔵を身近なものとして感じ取ってくださったようでした。(千早和子)

☆

10月21日、聖籠町蓮野にある豪農の館、二ノ宮邸の米蔵で堀川久子さんの舞踏公演が行われました。天気は雨が降ったり止んだり、ぬっとりとした気配

を漂わせる天候となりましたが、それが堀川さんの踊りと絡まり、何とも言えない妖しさをかもし出し、随分と趣のある公演となりました。

私はこの公演の準備から後片付けに至るまでを携わらせて頂きましたが、公演が終わる頃には、すっかり米蔵と二宮家の持つ独特な雰囲気に魅了されてしまいました。

建物は生きている。私はそんな風に思います。

日頃から古い屋敷や建物には、何か宿っているもおかしくはない、そう思っている私でしたが、あんなにはっきりとそういったものの存在を感じさせてくれる場所は、なかなか見つからないのではないのでしょうか。まるでこの米蔵に、すべて先達されてこの公演が行われたかのような錯覚すら私自身感じてしまったのでした。これは私の夢物語かもしれませんが、しかしきっとあの米蔵は、保存を支援して下さった新潟まち遺産の会の皆様、恩返ししがたかったのではないだろうかと思えます。

とても貴重な経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。皆様もぜひ一度、あの米蔵へ逢いに行ってみてください。あの包み込まれるような優しさに胸を撫で下ろされるでしょう。そして私の言っている意味が、お解かりいただけたら幸いです。(居橋典子)

堀川久子公演《境界のさざなみ》

2008.1.12(土)～14(月)

1日2回公演 1:00～ 4:00～

於：二宮家米蔵

涌井みゆきさん(上の記事のアート作品の作者)の作品を展示した米蔵で踊ります。

*涌井作品公開： 1.11～1.15(11:00-4:00)

詳しくは、090-7005-7598(堀川)へ



町屋マップ 2007 完成 上古町を歩く

11月4日(日)〈町屋マップ2007〉の発行を記念してマップを使ったまちあるきを行いました。

23人の参加者と世話人4人が午前10時NEXT21で集合の後、上古町地区にむかい歩き始めました。町屋を活用した店舗等は榎谷小路を境に下(しも)側・上(かみ)側に分かれて存在しており(榎谷小路境界は大火等によりほとんど存在していません)、前回の〈町屋マップ2005〉発行記念まちあるきは下の方を中心に歩いたので、今回は上を中心にしました。

上本町上古町にはまだまだたくさんの町屋が残っており、外観を見ながら散策し、「画廊 Fullmoon」や「Sugar Court」などでは店内を見学させていただきました。最終地点の「蔵織」ではオーナーの志賀さんから建物にまつわる歴史や建物の説明をしていただき、参加者の皆さんは町屋の魅力を十分堪能することができました。

その後、希望者と一緒に町屋を活用したカフェ「Foodelic」で食事をしながらの交流会を設け、参加

者からは是非定期的にまち歩きを開催して欲しいとの熱い要望意見をいただきました。世話人会としても検討していきたいと思っています。

町屋マップも「読売新聞」「新潟日報夕刊」に取り上げられ、書店等からも問い合わせ取り扱い依頼が多く寄せられました。

今回は助成金をもらわず会独自の発行ですので、たくさん売れることが当会の活動資金蓄積につながります。会員の皆さんからも多くの方に宣伝していただけることをお願いいたします。(伊藤純一)

会員の皆さまには〈町屋マップ2007〉を同封しております。

☆

今回のマップは1部200円で、新潟島では北光社、萬松堂のほか、砂丘館、画廊絵屋、画廊フルムーン、蔵織(この4カ所はマップに場所・連絡先が掲載されています)などで販売中です。

〇〇雨の中を下町ウオーク〇〇

10月8日(月・祝)に恒例の下町ウオークが開催され、当会世話人もガイドとして協力しました。今年はいにくの雨で参加者が少なかったのですが、その分説明もしやすく、中身は濃いウオークになりました。

途中雨がひどくなったので画廊絵屋に避難し、参加者たちと楽しく談笑するというひと幕もありました。初参加の方もリピーターの方も古い建物に興味をもってくださり、強い味方を得たような心強さを感じたウオークでした。(大倉宏)



ガイドの伊藤の説明を聞く参加者の皆さん。

新発田でまちあるきとシンポ

主催 日本建築家協会(関東甲信越支部)

2008.2.16(土)・2.17(日)

2.16 しばた町並みウォッチング

0:30~5:00

石泉荘・清水園・寺町通り・カトリック新発田教会・吉原写真館・白壁兵舎など

2.17 シンポジウム

午前10:00~ 午後1:00~3:00

午前:新発田のまちづくり団体の紹介

午後:パネルディスカッション

詳しくは、0254-24-8008へ

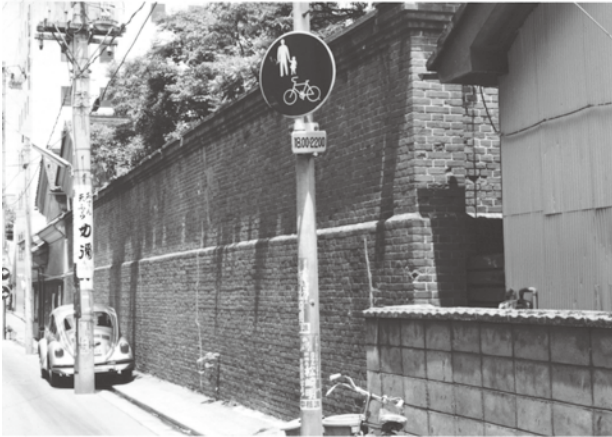
(アメニティ研究所 姫路桂)

■旧斎藤家別邸の保全に向けて■

9月4日に、当会も連名して新潟市議会に提出した「旧斎藤家夏の別邸(加賀田邸)と庭園の保存について」の請願が、12月12日の新潟市議会総務委員会で採択されました。18日の本会議でも採択されました。

旧斎藤家別邸は、大正7年に東堀通7の斎藤家(一部を移築復元したのが燕喜館です)の夏の別邸として建てられ、戦後GHQに接収された後に加賀田家の所有となりました。行形亭の隣りにあります。

建物も庭園もすばらしく、毎年大規模なお茶会が催されてお茶の関係者にはとりわけなじみ深い場所でした。(大倉宏)



2面で別邸のニュースを載せた斎藤家の、東堀通7にあった家のれんが塀です。
一部移転移築して、後は駐車場になりました。写真ではわかりにくいのですが、現在はれんが塀ではありません。
写真は東堀通りと古町のあいだの細い道を、下（しも）に向かって撮影しています。

古町どんで PR の試み

当会は、10月13日の土曜日に古町どんでの会場で行われた、「第3回市民活動フェスタ」に出店をいたしました。出店場所の近くに設置された舞台で行われていた大音量のLIVE活動に翻弄されながらも、野菜の即売会などに群がるおばさん達や、なんとなくブラブラと歩いている若者達を横目で見ながら過ごしたその日は、かなりの人達が往来していたにもかかわらず、当店に立寄ってくれた人達は8人と、案外少ない結果に終わりました。（佐藤威）

❖❖京都でも活動をPR❖❖

12月1日・2日と、京都で、「全国町家再生交流会」が開催され、全国から町家の保全活用に取り組む人々が集まりました。当会も参加し、1日のパネル討論で当会の活動を紹介しました。（澤村明）

柏崎の赤れんが棟が倒壊

柏崎の旧日本石油柏崎精油所の赤れんが棟が先の中越沖地震で倒壊しました。この建物は地元で製造されたれんがなどを使って1909（明治42）年に建てられ、工場が閉鎖される2003（平成13）年まで使用されてきました。会報4号（2005年11月）でも紹介しましたが、2005年に解体が公になった際に地元市民を中心に保存活動が始まり、保存への道が開きかけていただけに残念でなりません。（千早和子）



ニュータウンに木を植えよ

世話人リレーエッセイ

新潟市周辺では主要道路の整備に伴い、各地でニュータウンが造成されています。私は設計の仕事をしているのですが、ニュータウン内での設計において考えあぐねていることがあります。

それはどこも画一的で均質化した環境と敷地から、その土地の独自性、固有性を見いだすことが難しく、それを設計の手掛かりとして利用できないということです。

主要道路に大型店とそれを囲むニュータウンという典型的な郊外化の環境の中で、その敷地の特色を引き出すことは容易ではありません。そうすると、その土地固有の歴史や記憶が頼りになるのですが、造成されたばかりでそれありません。

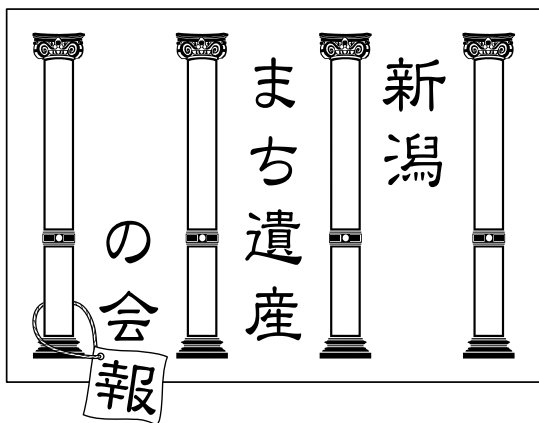
しかし、ないということは、これからその土地の記憶する歴史いかんで魅力ある土地になるか、ならないか、どちらの可能性も秘めているということではないでしょうか。

そこで考えるのは、その土地の記憶を今の時点から未来に伝達できるように、何年もかけて大木になる檜や樺を植えることです。何十年後にはそのニュータウンのシンボルツリーになるように、そして何百年後にはニュータウン全部を覆い尽くすまで成長するように、その地に脈々と根を張って、幹に記憶を刻んで欲しいです。（田中洋人）

□□□□編集後記□□□□

まちあるきはやるたびに新しい発見があります。参加者にはここで育ったという年配の方がいたりして、思わぬお話をうかがう

こともあります。人々が何十年（いや、何百年か）もかけて築き上げてきた町は奥行きが深いものです。（千早）



2007年12月
第9号
第2部



被災地の見守りと発想転換がカギ

能登半島、中越沖の被災地における建物修復支援活動をふりかえる

2007年は大きな震災が相次いだ1年でした。当会世話人の長谷川順一は、能登半島地震被災地へ出向くこと14回、そして再びわれわれの膝元で起こった中越沖地震の被災地へと、震災発生当初よりほぼ毎日何らかの相談を受け、リスト化された相談件数だけでも500件を超えています。

地域に長く親しまれてきた景観や伝統的な建物が、震災という突如襲い来る被害で、なすすべもなく解体されることのないように、また被災者が少しでも痛みと負担の少ない生活再建がなされるようにと、長谷川は今も修復支援活動を行っています。

以下は不眠不休で活動を続ける長谷川の報告です。

新潟県中越地震から、3年を待たずして起こった能登半島地震と中越沖地震。阪神淡路大震災での、多くの人々の苦い経験を二度と繰り返すことのないようにと始まった手弁当の修復支援活動も、能登半島、中越沖の被災地へと及ぶに至っては、さきの中越での経験を携えてということになった。

■赤紙即解体を回避

今年起きたふたつの大きな震災は、先の中越地震と比較して、周期特性において2倍から3倍という長

周期の波動によって、古い伝統木造構法の建物に大きな被害をもたらしたとされる。輪島では塗師蔵とよばれる土蔵、漆塗りの生業を営む作業場そのものが、大打撃をうけ、かつて北前船の中継地として栄え、歴史的な町並み景観をなす黒島集落が存亡の危機にさらされた。

しかし我々の震災直後からの情報支援活動は、応急危険度判定が被災地でなされるたびに繰り返されていた「赤紙即解体」を、ほぼ食い止め、行政による建築相談会にも一定の影響を及ぼした。

ほぼ間違いなく新築相談会となっていた3年前の各種相談会であったが、今回はさまざまな利益団体も含めて、「修復」を選択肢に入れざるを得ない状況をつくりだした。これは、マスコミが「修復」への理解を示し、まさに被災者に必要な情報であると、こぞって報道したということもあろう。「修復」はまさに時代の要請となったのである。

■被災直後から修復を呼びかけた

大工さんと被災者、そのどちらも震災被災者という



かつて小千谷縮みなどの集散地として栄えた時代を偲ばせる伝統的町家も解体の岐路に立たされている。(柏崎市東本町)



西山町別山地区での修復説明会の様子。被災地ではあわせて14回に及ぶ修復手法の説明会を実施。11月末までに450世帯の人々の不安に応えた。

未曾有の状況に接して、どう立ち回るべきかの、シナリオが描けない。そこへきて、業界利害を超えて、先進被災地の教訓と修復ノウハウの情報支援を行うというのは、未だかつてなかったのではないかとも思えた。

能登門前総持寺地区では、こういった試みに地元の街づくり協議会は即座に呼応。被災1週間を待たずして修復説明&相談会を被災地で開くことができた。

7月の中越沖では、発生翌日から行政や地域避難所をまわり、応急危険度判定にたいする正しい理解啓蒙、そして2週間後からは、コミュニティー・センターや集会所単位で修復相談会を開催するなど、被災後の時系列に応じて変わるニーズに合わせて活動を展開した。

ころない建築業者からは、「そんな簡単に直せると言うな」「何のメリットがあってそう言うのだ!」と脅されたこともあった。しかしながら「直せる」ということが、被災者にどれだけの安堵をもたらし、正しい建築理解につながる契機になしえたか、これは広く計り知れないメリットがあったものと思う。

■スクラップ&ビルドの時代は終わったが…

戦後の日本は、社会的分業に伴うモノづくりのブラックボックス化が著しく、建設業界に身を置いていてさえ、伝統建築に対する理解を得る機会が少なくなった。

高度経済成長の名の下、スクラップ&ビルドの流れが加速するなかで、モノづくりの技術や文化が発展してきたのも事実である。しかし、長きにわたって修復、再生、伝承を前提にして育まれてきた伝統技術を、ときとして横柄に否定して、短寿命&メンテナンス不能商品の大量生産、大量消費の社会の底流をつくりだしてきたのも否めない。

ときはまさに人口減少&少子高齢の時代。あふれるストック、社会インフラを抱えながらスクラップ&ビルドはもう転換期に来ている。これからはメンテナンスの時代である。公共工事を発注する側も建設業界も、



刈羽村下高町の被災した伝統民家。液状化被害により床は手ひどい被害を受けたが、柱や壁にはほとんど損傷がない。



刈羽村の倒壊寸前の神社。応急的措置を施し、修復の道筋を住民に示した。

もはや発想の転換が必要であるのはわかっている。それを公然と言えないのは、「メンテナンス」や「修復」がうま味のある仕事ではないからだ。

■建物を守ることは地域を守ること

他人のつくったものを直すのは手間もかかるし、勝手がわからないという側面もある。そしてモノの流通による利ザヤも稼げない。

しかしそれを乗り越えれば、逆に先人の知恵を謙虚に学ぶきっかけにもなり、技術の非ブラックボックス化に取り組めば、たとえ被災してもその建物の被害を読み解き、被害を防ぐ手立てを考える絶好の機会にもできる。震災の被災地は、そういう意味ではまさに、「スクラップ&ビルド」か「リノベーション&メンテナンス」かの価値判断を世間に問う、生々しい現場にもなってきたといえる。

京都議定書以来、世界的にも地球温暖化防止が叫ばれて久しい。建築廃材も全産業廃棄物の20%を占めるといわれるなかで、今や建物保全と活用は懐古趣味だ、好きもののお遊びだとは言わせない。あるものを救うこと、古いものを救うことは、路頭に迷うかの瀬戸際にある被災者を救うだけでなく、地域コミュニティーを守ることにもつながるといことが、中越被災地の事例からも見えてきた。

“MOTTAINAI”という価値観の力も借りながら、震災被災というタッチな状況のなかで、残せるものは残す。そして壊れたものから、よりよい建物をつくる道理を学び取り生かせるものは生かす。我々新潟まち遺産の会として、復興半ばにある中越沖の現場をまわってみるのも、今からでも遅くはない。(長谷川順一・住まい空間研究所主宰)